



緑爽会報 NO. 129

14年 6月27日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎ 03-3261-4433

事務局 松本恒廣

渡部温子 夏原寿一

近藤雅幸 近藤 緑

川口章子 西谷可江

梅雨の晴れ間に恵まれた市川散策

東京では一週間以上も雨が降り続き、天候が心配されたが、六月山行は梅雨の合間の素晴らしい好天になった。

今回は松本から田村さんが遠路参加された。まずは市川駅南に聳える45階建てザ・タワーズウエスタの最上階に登る。勿論エレベーター。上昇すると北面に筑波山がはつきり見えてくるはずが、展望フロアをポランテニアガイドさんと一周すれど、目の下の江戸



参加者

田村佐喜子・島田稔・夏原寿一
荒井正人・渡部温子・川口章子

川やその向こうの大東京ビル群は眺められても山は見えず、ちよつと残念。ここは千葉の西端なのだ。

地上に降りて大門通りを北上する。両側の民家の塀などに地元の書家が揮毫した万葉集の歌のパネルが張られている。そうなのだ、真間の継橋で知られるように、この一帯は万葉集に多くの歌が詠まれていて、あまりの美しさゆえに多くの男性から求婚され、自分のために人々が争うのを憂え真間の入江に身を投げたという手児奈の伝説も残る。

その手児奈霊堂に向かう途上、東へ折れて少し行くと真間小学校。何とその昔、田村さんはこの小学校に軍人だった父親に面会に来たことがあると大感激。

手児奈霊堂、真間の継橋、北原白秋がどん底の期間暮らしていたという亀井院などを巡って本日一番の急登、弘法寺(ぐほうじ)へ階段を登る。樹齢400年といわれる伏姫桜の枝垂れ桜があり一茶や秋桜子の句碑もある一角からは市街の眺めも良い。境内から木内ギャラリーの素適な建物を経て下ると江戸川沿いの道に出る。この道をしばし歩いて里見公園入り口の羅漢の井、北原白秋の紫煙舎、バラ園のある公園に入り市川市最高地点(30.1メートル)も確認、里見公園にまつわる戦いの歴史を聞いて草地でお昼とする。2時間半歩き続けた。昼食後、重い腰を上げ桜

並木を抜けてバスで国府台駅へ。京成電鉄で中山駅へ移動。

今は少し寂しくなった法華経寺の門前の通りを歩きポランテニアガイドさんが待つ精華園へ。法華経寺や仏教のお話、散策コースの説明を聞き休憩をとってから再び歩き始める。赤門を抜け遠寿院、五重塔を回って祖師堂前で記念撮影。このお堂の「比翼入母屋造り」という建築様式は他には岡山県の吉備津神社本殿しかないそうだ。(荒井 正人記)

人に会う予定がある荒井さんと別れて20世紀の日本を代表する日本画家、東山魁夷が生涯の大半を過ごしたゆかりの地に2005年11月に開館された記念館へ。

記念館は留学の地ドイツに想いをえた八角形の塔のある西洋風の外観で1階は展示室と多目的室、ミュージアムショップ、カフェレストラン。2階は展示室。

気温が高くなった3時の移動で、汗を拭き拭き入館した私達を見て、「涼みがてら多目的室でDVDをご覧になってから作品を鑑賞されたらいかがですか」と受付の人の勧めに従って閉館近くまでゆっくりと魁夷の世界にひたり散策を終えた。(川口 章子記)

◆緑爽会七月例会

暑気払い

日時・七月二十二日(火) 十三時

場所・JAC会議室

川嶋新太郎会員の解説で山岳写真の鑑賞会
会費・1,000円

昼食と飲み物を用意します。

申し込み先・川口 章子

☎ & f p x 0474638721

申し込み締め切り・七月十八日(金)

藤本慶光さんを偲ぶ

藤本慶光さんが急性白血病のため6月8日の朝、77歳の生涯を焉えられた。早過ぎる年齢で、まだまだ活躍して頂きたかったが、残念である。ご冥福をお祈り致します。

藤本さんは、河口慧海の高弟で高野山遍照光院住職・藤本真光師の長男として生を受け、7歳で得度、僧籍を得られている。東京大学在学中はスキー山岳部チーフリーダーとして活躍された。旭化成工業株式会社に勤務時代には東京大学カラコルム遠征隊(1963)に参加され、処女峰バルトロ・カンリ(7312m)初登頂者の一人である。

2001年から日本山岳会の理事・評議員を務められ、科学委員会・総務委員会・自然保護委員会担当理事として、平成21年(2009)から平成22年(2010)まで副会長の要職に就き、活躍されていたのである。緑爽会では、2012年秋の講演会・鼎談「深田久弥を語る会」の講師を務められている。

合掌

(西谷隆貞)



バルトロ・カンリ初登頂を果たし、CIIIにて渡邊兵力氏に迎えられる藤本慶光氏(1963.08.04)

初めての「深田祭」

深田 森太郎

緑爽会三月例会の羽村お花見会に参加した折に、松本さんから「四月例会の茅ヶ岳深田祭に行きませんか」とお誘いいただいた。茅ヶ岳は父久弥の終焉の山であり、私も父の死後三回ほど登っているが最後に登ったときから十年以上経っている。

深田祭と言うのも地元の荏苒市の関係者の方々の献身的なご支援で毎年この時期に茅ヶ岳登山口にある小公園で行われている、ということはかねて伺っていたが、私自身参加するのは今回が初めてであった。

この小公園は「深田公園」と命名されて父の一文をとった碑が建てられている。ちなみにこの碑文の選定は相談をうけて母も賛成したものと以前母から聞いた記憶がある。

当日の四月二十日は東京も曇天の肌寒い朝であった。緑爽会集合時間の十時前に荏苒駅に着くとホームでメンバーの皆さまと一語になった。

駅前から会場の公園まで無料の送迎シャトルバスが出ている。山岳会山梨支部の里見さんの出迎えを受けてバスに乗り込んだ。

十時発のバスの乗客は私達だけで、車内で顔合わせの挨拶など交わす内に深田公園に着いた。一本あとのバスで着くメンバーを待つて全員集合、茅ヶ岳登山道を歩き始める。

父の遭難後初めて茅ヶ岳に登ったのは母と妻と二歳の長女も一緒であった。当日は秋の好天の日で母になついていた娘がばあば、ばあばと言って甘えていた女岩での休憩時間を思い出す。

二回目の茅ヶ岳はNHKで「日本百名山」

が放映されたときそのエキストラ編の撮影でスタッフの人達と登った。ディレクターの采配で、酒を好んだ父を偲んで山頂で一献傾ける、というシナリオが演出され、頂上でビールとウイスキーをいただいた。放映されたこの番組を見た会社の先輩から、「君は銀座以外でも飲むのか」などと冷やかされた。



三回目の茅ヶ岳は世紀が変わってから弟と二人で登った。緑爽会報一二五号に里見さんが書いておられる通り、父の終焉の地に立っている標柱を立派な石柱に換えて頂いたのを見たいと思ったからである。この石柱の前で先日亡くなられた緑爽会メンバーの藤本慶光さんが読経を下さっている。

この弟との山行のときは兄弟で父を偲ぼうという殊勝な考えもあり、父が亡くなる前日に泊った穴山鉾泉の能見荘に前泊した。宿の前庭に「深田久弥終焉の宿」と書かれた柱が立てられていて驚いたが、これが今でもあるかは定かでない。

今回はこのとき以来の茅ヶ岳である。本来なら頂上を目指したいところであったが、碑前祭参加が第一目的とあれば時間的に女岩までの山麓トレッキングが限度であった。

登山口から女岩までは幾分上り坂ではある

が、木立の中の登山道を気持ちよく歩ける。途中で一服したときに、川口さんからゴディバのチョコレートが配られた。新緑の中で味わう高級チョコレートは格別であった。

当日の気温は四月下旬としては非常に低く軍手の指先が凍えてくるようにさえ感じた。手の平を握ったり開いたりして温めながら、一時間ほど歩くと目指す女岩の近くまで来た。所が残念なことに女岩は崩壊の危険性があるとかで近づけないように手前にロープが張ってあり、登山道は岩を迂回する形で付け替えられていた。

前の三回の登山のときは何れも女岩の下で休み岩から滴る水で喉を潤したが、今回は木々の向こうに岩陰を見るだけであった。

それでも辺りの景観はどことなく以前の登山を思い起こさせるもので、しばし立ち入り禁止のロープの前に佇んでいた。

「碑前祭に遅れますよ」という里見さんの声にUターンして麓の公園へと急ぎ下山、もう公園にはかなりの人が集まっていた。テントが張られその下に幾つものテーブルや椅子がセットされている。無料サービスコーナーで頂ける豚汁や麦茶もうれしく、特に豚汁は冷えた体が温まった。

あいにく霧雨っぽい天候となったが、テントの中のテーブルでお代わりした豚汁と持参の弁当で昼食をとっていると、大きな荷物を抱えた賑やかな一団が到着。次々と楽器を取り出し譜面台のスタンドまで立てられ、楽器の音合わせが始まった。オカリナの合奏である。寒空のしたの公園が一気に華やいだ。

やがて公園内の高台にある記念碑の前で深田祭の開式となった。横内荏苒市長の挨拶で始まった式は山梨山岳連盟の古谷会長、深田クラブの大久保事務局長など初対面の方も含

めて大勢の方が列席され挨拶をされた。挨拶が一通り終わったところで記念碑への献花と献酒が各参加団体代表の方から行われた。緑爽会では里見さんが用意して下さった花束を私が代表して碑前に供えた。

最後に参加者全員に日本酒、ワインが振舞われ、白鳳会の秋山会長の音頭で献杯を行った。そして元気で来年の再会を願う深田祭のプログラムは無事終了した。

式典終了後も公園内に設置されたパネルに揚げられた百名山の百枚の写真を丹念に見入る人や記念品を買い求める人、演奏が続くオカリナの音色に聞き入る人など、参加者それぞれが立ち去り難く深田祭の余韻に浸っていた。

今にも降り出しそうに低く垂れ込めた雲の下で哀愁を帯びて流れるオカリナの調べは、なまじ晴天の明るい日差しより父を偲ぶには相応しくも思えた。そういえば、父の葬儀の日も雨であった。

今年「日本百名山」の初版が出版されて五十年になる。これを記念してのイベントや出版が企画されている。

私も父が没した年齢を超えてしまった。これまであまりに関心であった父の足跡をこれからどう追っていくか、残された多くない日々の中で思案している。

事務局より

9月山行は、9月24日(水)・25日(木)の1泊2日、まず日野春アルプ美術館で中村好至恵さんの個展を鑑賞した後、夜はロッジ山旅で美術講習会。翌日は近くの山に登ります。くわしくは、次号掲載。

編集後記・今回も近藤緑さんに学びながらの会報作りとなりました。羽賀さんの近詠は次号で掲載予定。

(A・K)